

2018年10月2日 中学生徒礼拝より

聖書箇所：コリントの信徒への手紙二 4章18節

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

今日は皆さんに「花を売らない花売り娘の物語」という一冊のマーケティングの本から見つけたお話をしたいと思います。

そのお話に出てくる“花売り娘”は名の通り花を売っているのですが、彼女は「私は幸せを売っているんだ」と主張しているのです。どういうことでしょうか。

皆さんはお花を買ったことがありますか？そしてそれはなんのために？

人は花屋を訪れた時、花が欲しくて訪れるでしょうか？表面的にはそうですが、もう少し考えてみると違うのです。

例えば、病気の友達のお見舞いに行くので何か花が欲しい時、「花が欲しい」というよりもその花をあげることで、「病気の友達が元気になってほしい、じゃあ気分が明るくなるような花を買おう」というように「願い」の方を重視して花を買います。つまり、花売り娘はただ花を売っているのではなくてそういった花に込められた「想い」を売っているんだと言っているわけです。

なるほどそういうことか、と読んでいて納得しました。いろいろな想いに拾われ、駆られた私たちが見る、またはこれから先見ていく、たくさんの「もの」。「もの」がたくさん溢れている社会に生きる私達にとって、本当の幸せとは何だろうと考えてみました。

私は美術部に所属していますが、小さい頃から絵を描くことが好きで、幼稚園の時のある母の日に、感謝の意を込めて似顔絵を描きました。当時は「結構似ている」と自画自賛しつつ母にあげ、母はそれを自分の机にかざりました。今の私から見れば、それは似顔絵とも呼べないもので、どうしてそんなにも大切にしているのか聞いてみると「上手じゃなくても私を一生懸命見て頑張ったっていう純粋な気持ちがすごく伝わってきたからだよ」と教えてくれました。その言葉にふと私は思いました。母は絵そのものよりも私が込めた「ありがとう」という「想い」や一生懸命に描いたという「ストーリー」の方を大切にしているな、と。

私も「もの」に込められた「想い」がずっと心に残っているという経験があります。今年の夏休みにオーストラリア研修に参加したのですが、日本に帰る前の最後の日にホストファミリーからプレゼントをたくさんもらいました。そこで感じたのは「プレゼントをもらえて嬉しい」というよりむしろ「プレゼントにこもった想いが嬉しい」でした。どれも私とホストファミリーとのストーリーに携わったものばかりでそのプレゼントという「もの」の奥に「私達との日々を忘れないでね」とホストファミリーから想いを託されているようで心がポカポカしました。母と同じく、プレゼントという物質ではなくてその「もの」に込められている「想い」が今となっても忘れられないぐらいに人を幸せにしているのだと知りました。

私達は物質社会の今を生きていて、目に見えない相手の気持ちを考えるのは面倒くさい、きれいごとを言っている暇はない、とあってしまいがちです。しかし「もの」の所有に執着して本当の幸せを見失いがちになっていては、自分の価値観さえ他の誰かの影響で作られたものだと不安になってしまうのではないのでしょうか。

「もの」を手に入れることで自分の欲求を満たすのが悪いわけではありませんが、少なからずそれは自分の中で自然に湧いてきたものではないでしょう。テレビや雑誌、周りの人からなどの影響やレッテルに縛られ生まれたものだと私は思います。

「もの」を持つという物質的な豊かさより、その「もの」の後ろにあるストーリーや想いを汲み取り、そこから得られる心の面での豊かさの方が本当の幸せに繋がっていると思います。もちろん自分1人の幸せだけではありません。隣人との信頼関係が生まれたり、相手に対する愛情というものの大切さに気づいていけたりするのではないのでしょうか。

今後皆さんが「もの」を手にする時、または贈り物をあげたりもらったりする時に、「ストーリー」や「想い」を大切に考え巡らせてみませんか。そのストーリーの隅っこに「花を売らない花売り娘の物語」も含まれていたら幸せです。